地下浸透がよく、河川の大部分は涸れ川で、大雨時を除き水は流れていません。飲用水をはじめ使用水のほとんどを、海岸近くで湧き出る地下水と中山間地域の地下水ボーリングに頼っています。このため、済州道では地下水の保全を最大の水環境問題と位置付けています。

また、大気中の有害成分が雨水に溶けて地下水を汚染するのを防止するため、発電所以外の大きな大気汚染源は見られません。ゴミ処理も焼却ではなく埋め立てで行っています。しかし、小さな島は環境容量も小さく、いずれは廃棄物処理に困ることから、積極的にリサイクルが進められています。市街地だけでなく観光地のあちこちにビン、カン、プラスチック、紙類、一般ゴミなどの分別回収容器が並んで設置されています。島の南のリゾート地区にある人口8万5千人の西帰浦（ソギッポ）市の廃棄物処理場では、毎日各家庭やホテルなどから出る残飯を約15t回収しています。そのうち2tでカモや鶏を養殖して出荷し、残った残飯は肥料化して農家に無料配布しています。また、回収油でセッケンを製造していました。

研修期間中、2週間は済州道保健環境研究院の環境調査課にお世話になりました。ここでは、沖縄と済州の土壌の流出に関する比較研究を共同で行いました。済州島の土壌を、赤土研究室が開発した簡易手法で診断すると、沖縄の国頭マージ（赤土）なみに流出しやすい土壌もありました。最終日は、スライド写真を用いて研究院の方々に沖縄の赤土汚染問題を韓国語で説明しました。質疑応答で説明が難しい時は、ボードに漢字で筆談するとだいたい理解できたようです。済州島では、漢拏山へのロープウエー建設など、大規模な観光施設開発が企画されており、地形が急なので沖縄の赤土汚染と同様な問題の発生が懸念されています。その時は土壌流出防止の技術移転など、できる限り協力したいと思います。

写真　済州島の漁村にて。背景は山房山。

2年前に沖縄に派遣された済州道の研修生たちとの懇談では、このような交流を公務員だけにとどめず、県民、道民ぐるみの交流に発展させたいとの意見で一致しました。その第一弾として、6月の済州国際市民マラソン大会（フル、ハーフ、10km）にツアーを組んで訪問する予定です。読者の皆様もごいっしょにいかがですか？

（赤土研究室　大見謝辰男）

研究所の動き

集談会100回記念
衛生環境研究所公開研究発表会を開催

『集談会』と呼ばれる所内研究発表会の100回を記念した公開研究発表会が、昨年9月10日、県庁4階講堂で開かれました。0-157や0-26など腸管出血性大腸菌、ハブクラゲ刺症対策など8題が報告されました。その中で微生物室の久高研究員は、全国で0-157の発生が60%以上あるのに対し、本県内で0-26が64%占めており、重症事例は少ないものの発生の多くが保育所での集団感染であることなど、その特徴点を紹介しました。

発表会には、各保健所や市町村の衛生・環境問題に取り組んでいる職員や一般市民ら200人余が詰めかけ、液晶ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰを用いた視覚に訴える研究報告に耳目が集りました。

平成11年度（第17回）
JICA衛生・環境分析技術者コース研修が修了

今年度（第17回）のJICA衛生・環境分析技術者コース研修は、昨年12月17日に全ての日程を無事修了いたしました。同研修は昭和58年度に始まり、今年度で17回目になります。遠くは南米やアフリカ、大洋州、アジアなど、世界の国々から、これまでに91名の研修員が当研究所で技術を学んで帰国しました。

今年度は、南米から4名、エジプト1名の研修員が感染症、衛生動物、食品化学、大気汚染、水質汚濁（「抗毒素」「毒蛇生態」以外）のサブコースに分かれ、5.5ヶ月間主に分析技術を勉強しました。

同研修は回を重ねるごとに内容も充実してきておりますが、研修員及び講師ともに言葉（英語）の面など、まだ課題点があります。

※衛環研ニュースではみなさまのご意見、ご質問をお待ちしています。
E-mail:xx03218@pref.okinawa.jp
ホームページ:
http://www.pref.okinawa.jp/98/eikanken/Default.htm

発行　沖縄県衛生環境研究所
〒901-1202　大里村字大里2085
TEL(098)945-0783
945-0781